

車窓を楽しむ鉄道の旅 その 5
赤城山麓を横断 上毛電鉄体験記

群馬県は、県全体の形が「鶴が空を舞う」ような形をしていることから「鶴舞の国」と言われている。ほぼ四方を山に囲まれていて、山裾の広がりが大きく平地は限られている。これらの山々を源とする川がいくつも水を集めて、利根川という大河を構成している。

古代より、利根川の支流に沿った谷間の平地や、川が合して流れを大きくする地点に近い沖積台地のような所に人が住むようになり、集落ができてきたようである。遺跡の発掘などで様々な事実が明らかになり、この県が持つ歴史上の奥深さは注目に値する。

群馬県の県庁所在地は前橋市だが、商業の中心地でありさらに鉄道の拠点駅になっているのは高崎である。いずれも人口 30 万人以上の大きな町であり、どちらが県庁所在地なのか間違える人もいる。

遡れば、廃藩置県の前は高崎藩と前橋藩があり、それぞれが高崎県・前橋県となったのだが、後に周辺の県も合わせて合体して群馬県となった経緯があり、この間に様々な出来事があった今日に至っているようだ。

県庁所在地の前橋市の中央前橋駅から、赤城山の南麓を横切って東に向かい、桐生市の西桐生までを走る鉄道が上毛電鉄上毛線。一度乗ってみたいと思っている内に何十年も時が経ってしまった。



平成 30 年 3 月 15 日

<まずは前橋へ>

朝出発の旅の定番メニューは八千代台 8 時 26 分発モーニングライナー上野行。いつものように 9 時過ぎに JR 上野駅に到着。

高崎線は 9 時 26 分発快速高崎行。車内は学生とビジネス客がパラパラと乗っている程度。

新聞を読んだ後は景色を眺めながらウツラウツラ……。

高崎着 11 時 05 分、両毛線は 11 時 07 分発なので小走りの乗換え。手入れが行き届いていないローカル線の窓ガラスはくすんでいる上に外は春霞なので、なんとも憂鬱な車窓の景色。車内は学生、仕事

で移動する人、病院へでも行きそうな老人、などなど様々。

定刻通り発車した電車は高崎問屋町、井野、新前橋と上越線を走った後で本線から分れて両毛線になる。両毛線に入って最初の駅が前橋。さて、ここが今回の旅の出発地点。

北口（赤城山口）を出ると、美しい駅舎と駅前広場ではあるが県庁所在地とも思えぬ静けさ。北に向かって真っ直ぐ伸びるケヤキ並木の道を進むと、銀行や保険会社などの支店が並び一見オフィス街の様相ではあるが、駅前旅館・骨董品屋・アートギャラリーなども並ぶ、不可解な町並み。

国道 50 号線が近くなると、さらに「寂れた歓楽街」が加わってくる。驚きながら 50 号線を渡ると右手にガラス張りのモダンな中央前橋駅が現われた。ここまで歩く間に食事ができそうな店は見つからず困っていたら、駅前に一軒の食堂が待っていてくれた。昼食は天ぷらうどん、老夫婦が二人だけで切り盛りする店には、サラリーマンや近所の老人がほどよく入っていた。

昼食を済ませて腹も落ち着いたところで駅舎に移動。横町には潰れかけたような飲み屋街、誰も住んでいない雑居ビル、ベニヤ板が打ち付けられた麻雀屋とダンスホール・・・、どう見ても元気な町とは思えない。駅入口に建つ銀行の広告看板に書かれた「環境と暮らしを考える」というメッセージが白々しく感じられた。県庁や市役所ほか主要な機能が集まる町の中心街から離れたうらぶれた町に「中央前橋」と名付く駅があるのが面白かった。



<上毛電鉄の旅>

中央前橋 12 時 45 分発西桐生行。先頭車両の行先表示に「ワンマン」と書いてあったが、運転士は女性だった。上毛電鉄の旅は広瀬川に沿った柳並木を見下ろしながら南東に走ることで始まった。

川の流れて再び北東に進路を取ると最初の停車駅である**城東（じょうとう）**に入る。平野に広がる住宅地という印象の風景が広がる。

城東とは前橋城の東にある町ということである。前橋城は元の名は「厩橋（まやばし）城」と呼ばれ、室町時代にできた城とのこと。明治になり廃藩置県により前橋県の県庁が本丸跡に建てられ、現在は群馬県庁が建っている。

城東駅を出ると暫くは北東に走り続けるが、小さな川を渡ると東に向きを変えて**三俣（みつまた）**。南北朝時代から存在する地名で、その由来は「古利根川が三つに分れる地点」だったことによる。現在の桃の木川や広瀬川などがその名残なのだろうか。駅の隣に建つ周囲の景色と馴染まないような洋風の豪邸が気になった。

県道 3 号線と並走して真東に向かって、**片貝（かたかい）** 駅に入る。海もないのに貝に縁のある地名？と不思議に思ったのだが、実は貝ではなく「榎」だった。昔利根川が流れていた頃（古利根川）、流れが静かで片方の榎だけで船を進めることができた（片榎）ことから付いた地名だとのこと。進行方向左側に赤城山の輪郭がうっすらと現れ始めた。

赤城山麓の海拔 100m 前後の緩斜面を横切るように走り**上泉（かみいずみ）**。桃の木川と藤沢川が合する所で、赤城山から流れてくる小さな川の水流を中心として天然の溜池のような泉があったのかもしれない。上泉という地名は南北朝時代から存在する古い地名だとのこと。

電車はさらに東進、桃の木川を渡ってしばらくで左にカーブして北東に進路を取ると**赤坂（あかさか）**。一般的には、「赤土の坂道」を由来とするものが多いようだが、この場合はどうだろうか？

国道 17 号線を横切ると**心臓血管センター** 駅に入る。昭和 40 年に列車交換用信号所として開業し、平成 6 年に前橋循環器病センター駅に昇格。何らかの病気をかかえていそうな表情の人達が何人か下車した。駅とセンターとの間を流れる川に刎木（はねぎ）造りのような立派な橋が架かっているのが見えた。このあたりは亀泉町と言うようだが、地図を見ると赤城山から幾筋もの沢が走ってきており、さらに沢同士をつなぐ水路も完備されている。赤城山の自然が農業や牧畜のための重要なインフラになっている。心臓血管センターから 700m ほどで**江木（えぎ）**。駅の近くに養豚農家が目立つ。駅から少し離れると、牧草地、畑、住宅地などが巧みに棲み分けられているように感じた。

沿線の町は亀泉町・堤町・堀越町と水の流れに関係した名前が続くのが面白い。徐々に住宅地よりも農地が占める割合が大きくなってきたが、小川を渡ると急に住宅地の広がりが始まり、**大胡（おおご）** 駅に入った。大胡の「胡」は渡来人を意味すると言われており、古代には渡来人が住み着いたと考えられている。平安時代から大胡城を拠点としてこの土地を治めていた大胡氏に由来する地名。大胡城は駅の北にある現在の養林寺の場所にあった。

赤城山への交通の拠点駅なので、駅前の広場も広く観光バスのための駐車場も確保されている。乗務員が交替して、ワンウーマンカーからワンマンカーになった。

江木から東北東に走っていた電車が樋越駅に入る手前で右にカーブして東南東に進路を変えた。地図で見た感じだと、この地点は上毛電鉄が赤城山に最も接近する地点のようだが、残念ながら霞の中で薄らとしか見えない。

樋越（ひごし） 駅は、民家と民家の間に割り込むように座っていて、家の中が見えてしまう。農業用水路の関係で付いた地名なのだろうか？ここは海拔170m余、地図を見ると小さな川の流れが幾筋も走り、溜池のようなものが数多く並んでいる。

引き続き東南東に走り、僅かな距離で海拔179.9mの**北原（きたはら）** 駅。かすかに見える赤城山は、ここからが一番大きく見えるような気がする。

新屋（あらや）、駅を挟んで南北に住宅地が広がり、駅と線路は民家の間に挟まるように置いてあるような雰囲気。ここで海拔180mを僅かに超える。一般的には新屋（しんや）・新宅（しんたく）などの字地名は、本家・本宅から分家した家を指すことが多いそうだが、ここの地名の由来はどうだろう？

上毛電鉄の北側には大前田・月田・稲里など田圃に関係する地名が点在し、南側に広がる一帯は女淵という字名で、水の流れと深い関係が感じられる。電車は単調な音を刻みながら淡々と山麓を横切り、川を渡って**粕川（かすかわ）** 駅に入った。

元気な農業・牧畜地帯を感じさせる景色を見続けてきたが、このあたりでは廃屋と太陽光パネルが目立って来た。農業・牧畜が持続できない何かが潜んでいるのかもしれない。駅横の民家の裏に広がる畑の中を元気に走り回るイタチが見えた。

その昔、粕川村の近戸神社で神事が済んだことを下流の子神に知らせるために粕酒を川に流したことから、川に粕川と名が付いたのが地名の起源だとのこと。粕川は赤城山の小沼を水源として粕川駅の西側を流れ下って広瀬川に合しており、近戸神社は粕川駅の北200mほどの所にある。

旧粕川村（現在は前橋市粕川町）の東端に位置する駅が**膳（ぜん）**。平らな土地が膳棚のように段状に連なっていたことから付いたという説と、鎌倉時代にこの地を治めていた三善氏の子孫である善氏（後に膳と改称した）の居城があったことから地名が生れたという説とがあるようだが、いずれが正解かは定かでないらしい。膳城跡は駅の北側の高台のようなところに残っている。車窓から「赤城山の卵」という看板がいくつか見えたので、養鶏が盛んな所ようだ。

膳駅を出て小さな川を渡ると、広い広い前橋市を離れて桐生市に入る。桐生市に入って最初の駅は

新里（にいさと）。駅のすぐそばを流れている川は、赤城山の東側の中腹から流れてくる鑄木川。

明治21年に新川・山上・鶴ヶ谷・大久保・関・奥沢の六ヶ村の合併でできた村で、「新しい村の融和」を願って付けた村名だと言われている。

新里駅を出ると一旦北東に向かった後で再び東北東に向かって一直線に走るようになる。赤城山は左後の方に去ってしまい、小さな川や水路が走る赤城山麓の風景は終わった。

新川（にっかわ）、鯉料理屋の看板が目に入ってきたが、鯉の養魚をしている村だろうか。新川駅を出ると北東に向かうようになり、正面に鳴神山を中心とした渡良瀬川東岸の山が大きく広がって見えるようになってきた。

東新川（ひがしにっかわ） は平成5年にできた新しい駅なので、前後の駅間距離が短く、あっという間に**赤城（あかぎ）** 駅に到着。この駅は昭和3年に新大間々駅として開業し、昭和7年に東武桐生線延伸による乗り入れを経て、昭和33年に赤城駅と改称した。その名の通り、前橋駅・大胡駅と並んで赤城山への交通拠点となる駅だが、東武線からの客の方が圧倒的に多い。

